佐伯理一郎・再論

長門谷　洋　治

第二三回日本医学会総会は一九九一年四月、京都市において開催された。日本医学会の第一分科会は日本医史学会で、その第九二回が杉立義一会長のもと、同じ京都市において六月一・二日に行われる。

ところで今から五三年前、一九三八年に同じ京都で第一〇回日本医学会が開催され、そのさいも第一分科会が開催（第三高等学校講堂）された。分科会長は入澤達吉（敬称略、以下同じ）で、分科委員として藤浪剛一・小田平義・緒方富雄・佐伯理一郎が名を連ねた。京都での医史学会とあれば佐伯が会長となってもおかしくはないであろう。しかし佐伯は同総会でもうひとつの大役を果していた。すなわち第二六分科、産科・婦人科学の会長である。これは第三六回日本婦人科学会にあたっていた。四月二日午前八時三〇分の開会の辞のなかで「不肖老人会長の席を穢し、汗顔の極に存じますが、其光栄は深く感謝致します。私は本年七七歳となりまして、最早余年も僅かと存じ……」と述べている。彼はその後一五年を生きた。（一八六二～一九五三）

この第一〇回日本医学会では日本医史学会主催の医史展覧会が五日間にわたって第三高等学校本館で行われ、一般に公開された。これは富士川游の指導によったが、展示中医書の大部分は富士川の、書画幅の大部分は佐伯の所蔵によるものであった由。さらに佐伯は医史学会に一人で五題もの一般演題を提出しており、大変な活躍ぶりであった。

医史学会が日本医学会に加えられるようになったのは前回の第九回からであったが、佐伯は当初は産婦人科医として、のちには医史学者としても、生涯中に行われた医学会総会のほとんどに出席したといわれる。なお京都で日本医学会が開かれたのは一九二二年の第六回が最初で、この回が二度目であった。三度目の京都での日本医学会は一九五五年（第一四回、このときの第一分科、第五七回日本医史

学会々長は内山孝一、委員・大矢全節）で、佐伯はその約二年前に九一歳で死亡している。

本学会が正式に日本医史学会を名乗ったのは一九二七年で初代理事長は呉秀三であった。

佐伯はその発足時に評議員となっている。

佐伯は『医譚』第七号（昭和一五年一二月発行）の《富士川先生追悼特輯》の中で「私が始めて博士を知りたるのは、明治廿一年の事で、当時私はミュンヘン大学に在学中、親友小池正直君（後男爵となる）に勧められて『産婦人科に於けるマッサージ』と題する一論文を中外医事新報に投じ、其社長原田貞吉君から書状が来て此後は編輯主任富士川游君に直接通信せられてドシ〳〵沢山の原稿を送られたしと申して来た。是が抑々富士川君と文通を始めたる初めでありました」と述べている。富士川が広島から上京し、中外医事新報の編集を主宰したのは明治二〇（一八八七）年秋であるが、上記佐伯の『産婦人科におけるマッサージ』とは、同誌二二八号（明22・9・25発行）二二九号（10・10発行）のつぎの論文かと思われる。（宗田一氏による）

チューレ・ブランド Thure Brandt 氏婦人科的按摩術

独逸国江南大学産科院ニ於テ

ドクトル　佐伯理一郎

この論文を投じたのはイエーナ大学からであることも判明する。ちなみにイエーナには明治三一（一八九八）から約二年間、富士川が留学する。

佐伯は明治二四（一八九一）年四月帰国するが、その後も中外医事新報に以下の寄稿をなしている。（宗田一氏による）

欧米諸国医学の景況　三〇二号（明25・10・25）

これは同年中に三回、翌年に七回と計一一回連載され、さらに同二七（一八九四）年『巡遊記』と題して三四四号より六回にわたって連載されている。この間同二六年の三〇八号・三一五号には

半夏及伏龍肝等ノ妊娠呕吐ニ対スル効験ニ就テ

を投じているが、これは自らの臨床経験をふまえた産科漢方に関する報告である。

佐伯は明治二八（一八九五）年二月、吐鳳堂書店より『戦時平時救急看護法』（懐中手帖形）を出す。彼が「我処

女作」とするものである。ドイツのリューレマン著の翻訳である。ついで同年七月、同じ書店から『普通看病学』を出す。原著はビルロートである。さらに同年十二月三十日発行、同じ吐鳳堂から『珠氏産科学』巻一を出す。これはカール・シュロェデル Karl Schroeder（ベルリン大学）の著を訳したものだが、彼が『日誌抜萃』に「珠氏産科書翻訳ヲ約ス」と記したのは同年六月一五日で、彼は内地勤務とはいえ、日清戦役で軍務に服しているときである。本書の序言が明治廿九年一月となっているから、実際の刊行がこの年であることは、『日誌抜萃』二月一日に「珠氏産科学第一冊出版ス」と記している点からも明らかだが、それにしても早い上梓である。ちなみに巻二は同廿九年八月、巻三は同三十年四月に刊行された。

文献　長門谷洋治　佐伯理一郎とその『日誌抜萃』日医史誌三五・一三八、一九八九

（大阪府豊中市）

草壁系諸帝の病迹

稲垣　直

天武天皇の諸皇子は秀れた才幹の所有者が多かっただけに、皇位への競望の念もそれぞれに強かった事が推察される。

そのような背景の中で、皇后鸕野讃良皇女は自己の所生である草壁皇子を即位せしめ、その後は皇子の子孫を以て順次、皇位を嗣がせて行く事を企図、まず草壁皇子の立太子に成功された。（但し古代の皇太子は現在のそれとは若干意義が異なる。）

ところが皇子は即位を前にして二十八才にて薨ぜられたので、皇后は自ら即位―持統天皇―、治政一〇年の後、草壁皇子の長子珂瑠皇子を、十五才の少年であるにかかわらず即位させ―文武天皇―、自らは太上天皇として共同統治